

## 勇気の支え

越谷市立富士中学校3年 上神田 那奈

「お父さんの給料は、みんなが払っている税金から出ているんだよ。」

去年、私は母のこの言葉をもとに作文を書いた。自衛官である父を通して、税金が誰かの仕事や生活を支えていることに気づいたからだ。身近な人の姿を介し、初めて税金が、「人と人をつなぐもの」に見えた。けれど今年、私はもっと大きな「支え」に気がついた。

二〇一六年、最大震度七の揺れを観測する熊本地震が発生した。暗い部屋の中、私は母と共に、召集がかかり出かけてゆく父の背中を見送った。幼いながらも、父が危険な場所に行くことは理解していた。それは、自然が猛威をふるい、今まさに何人もの民間人が被害に合っている場所。怖くないわけがない。危険があると分かっている、それでも行く。私は疑問に思った。父のその覚悟を支えているものはなんだろうと。

後日、父が帰宅した時、私は何気なく「怖くなかったのか。」と聞いた。父は少し考えてからこう言った。

「怖くないわけじゃないけれど、仲間もいるし、大丈夫だよ。」  
父の言う「仲間」とは同じ自衛官として働く人のことだけではない。任務に必要な装備、安全な車両、情報を伝える通信設備、訓練を受ける施設、食事や医療の体制。そのすべてがあってこそ、父は自衛官として、誰かの命を守ることができる。そしてそれらを支えているのが、税金なのだ。

二〇二四年度の防衛費は、過去最高の七兆円越えであり、国家予算の約七パーセントにおよぶ金額である。このお金が、給料となり、武器となり、装備となり、国を、誰かを守るために働く自衛官を支えているのだ。

税金は、ただのお金じゃない。人の安全を、行動を、命を支え、そしてその命を守る人の「覚悟」を支える。誰かが命をかけて働くとき、それを支える見えない力だ。「見えないけれど確かにそこにある支え」それが税金なのだと、自分の家族を通して知った。

将来、私が税金を納める立場になったとき、ただ義務としてではなく、「このお金が、誰かの勇気の支えになる」と思いたい。そして私は、自分の税金で誰かが守られる社会を、誇りに思える人間でありたい。